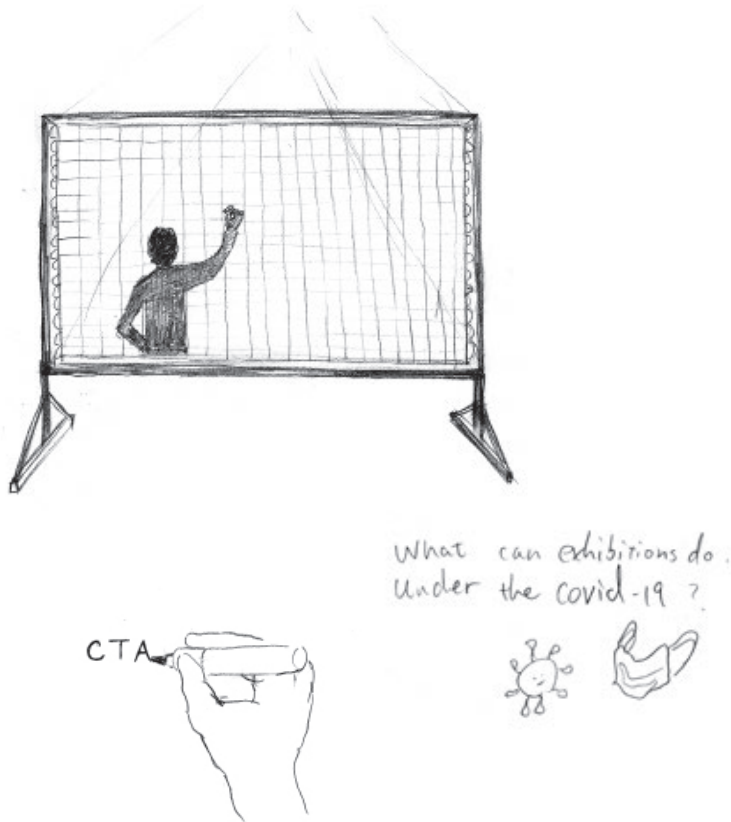


「もし太陽に名前がなかったら」
—《NC_045512》をめぐる試論

神野有紗 [千葉県立美術館 研究員]



はじめに

山下が読み上げる「A、T、C、G…」のアルファベットを、小林がひたすら書き連ねていく。13時間にも及ぶパフォーマンスの様子は、新型コロナウイルスの流行下において普及したオンライン会議で使用されるヴァーチャル背景に合成され、さらにその映像は約2,000枚のガーゼマスクを作家の手によってつなぎ合わせて作られた横6m、縦4mのスクリーンに投影される。このように象徴的な要素を重ね合わせることで出来上がった作品は、《NC_045512》という暗号のようなタイトルも相まって、一見すると謎解きの一種のようにも感じられる。「NC_045512」とは、2019年12月に中国武漢市で発生したとされるCOVID-19の、最初に検出されたウイルスのゲノム情報の名称であり、山下が読み上げ小林が書き連ねるアルファベットの文字列はその塩基配列を示している³⁸。

本展覧会に際して特別に制作された新作《NC_045512》³⁸は、新型コロナという現象を通して見えてきた現代社会の多面的な様相を重ね、作品に定着させることを試みている。これまで「書く」「数える」といった、人間のシンプルで日常的な行為を媒介として、自然や社会の様々な現象を捉え直す試みを行ってきた山下麻衣+小林直

人(以下、山下+小林)の活動において、本作はどのような意味をもつのだろうか。本稿では、この新作ビデオ・インスタレーションに焦点を当て、これまでの山下+小林の活動が本作にどのような形で帰結し、そして新たな発展を見せているのか、作家にとって国内では過去最大規模の個展となる本展覧会に込められたメッセージと共に読み解いていく。

《NC_045512》に関する考察

まずは、《NC_045512》を構成する要素ごとに分解しながら、その全体像を紐解いていきたい。

はじめに指摘できるのが、作家が制作に費やした労力と時間の大きさである。「NC_045512」の全塩基配列29,903字を書き上げ、画面全体を文字で埋め尽くすまでに要した時間は約13時間。この全ての過程を早回しする事なく丸ごと見せる本作は、2人のこれまでの映像作品の中で最も長時間に及ぶ。約2,000枚ものガーゼマスクを全て作家自身の手でミシンを用いて縫い合わせると言う行為も、「自らの」身体による手作業にこだわり続けてきた山下+小林らしい、ある意味では非常な労力を要するものである。こうしたこだわりは、言葉や形になる前の、人間の意識の埒外にある何かについて、自らの時間と労力をかけることで向き合ってきた山下+小林の一貫した姿勢の現れである。

労力、時間と並んで本作品の軸を成しているのが、人間以外の他者に対する山下+小林独自の価値観である。海や山、蟹気楼、あるいはライオンや犬など、山下+小林はこれまでコントロールできない自然や動物と関わることによって「人間」という存在の輪郭を探ってきたが、この意味において本作で二人が対峙する「ウイルス」という存在もまた、人間の姿を相対的に映し出す他者であると言えるだろう。この3年間、未知の存在であるウイルスを前にして社会がどのように変化したのか、あるいは世界中の人々がウイルスへの不安にどのように向き合ってきたのか、その一端が、合成されたヴァーチャル背景やガーゼマスクで作られた巨大なスクリーンに重ねられてい

る。本作が持つこうした多層構造は、新型コロナウイルスに対する人々の多様な行動や反応を通して、人間という存在を客観的に描き出そうとしているようにも見える。

さらに本作品にオリジナリティを与えているのが、山下+小林独自のユーモアによって生み出される、物事を俯瞰的に捉える姿勢である。ウイルスの脅威を前にした人々の反応は、恐怖や不安、あるいは行き場のない怒りなど、おおむねマイナスのものであったと言えるだろう。全世界的に、ある日突然、日常生活が覆されるという経験は、人々の価値観の違いを顕在化し、社会の分断や混乱を巻き起こすこともしばしばあった。それに対して、山下+小林はこの謎に包まれた存在をあえて肯定も否定もしない。彼らが本作で行っていることは、ウイルスのゲノムの塩基配列をひたすらに書き起こしていくこと、ただそれだけである。この非常にシンプルな作業を長い時間を費やして淡々と遂行する二人の姿は、ウイルスの脅威に真っ向から立ち向かう、あるいは人々の不安を具現化しようとする潮流とは一線を画している。アルファベットを呪文のように唱え、それを整然と、黙々と書き続ける二人の様子は、時折画面に現れては作業に没頭する飼い主に戸惑いを見せる二人の愛犬・アン²³⁶の姿もあいまって、本展出品作である《積み石》²³⁶にも通じるシュールさをたたえているようにも見える。物事を一步引いた立場から見るという制作態度は、これまでの彼らの作品にもしばしば見受けられる。荒木夏実は山下+小林の活動について、「メインストリームからあえて横道にそれ、贅沢に時間を無駄遣いしながら、自然の中に人間の技(アート)を残そうとする山下+小林の果てしない旅²³⁷」と形容し、その独特なユーモアによって敢えて世間の主流から外れた場所に立ち、物事を俯瞰する、という彼らの持ち味について分析している。

こうした社会や自然の捉え方は、山下の博士論文においても以下のとおり自覚的に論じられている。

私の多くの作品に含まれる長時間を浪費するパフォーマンスも、「時は金なり」という高度資本主義社会の原則に反した行為である。だが、私自身も資本主義の真ただ中に生

きていて、その原則に変わりはない。反資本主義を翻したところで、その先に答えは見つからない。私達にできることはただ「気づく」事である。五日間、毎日働くのも一つなら、別の可能性、例えば、道を作る為に走り続けるような事も選択肢の一つとしてあるかもしれないよ、と。⁹³

最後に指摘できるのが、「わからない」もの、「不確か」なものへの考察である。2021年に黒部市美術館で開催された個展「蜃気楼か。」では、屋外プロジェクトとして《infinity~mirage》⁹⁴が制作された。本展覧会の開催に際して行われたインタビュー記事に掲載された山下+小林の言葉は、この考察について重要な示唆を与えてくれる。以下、その一部を抜粋する。

山下 | 震災前と後の時と同じで、今まで普通だと思っていたことがすっかり無くなってしまい、不確かな状況というのを実感します。そんな時代というか、タイミングとして重なっているのかもしれないですけど、今回の《infinity~mirage》でも「不確かさ」を扱っていて、そのまま作品になっているのになって。

小林 | ただ僕は「不確か」については震災やコロナ以前から思っていることで、何もネガティブって意味ではないです。今回《infinity~mirage》で∞という記号を打ち出していますけど、無限の宇宙と考えたとき、僕は子供の頃勉強していてしんどくなると、よく窓から双眼鏡で夜空を見て遠くの星とか覗いたりするのが好きだったんですが、遠くを想像するとちょっと気持ちが楽になりますよね。(中略)…震災やコロナで思い詰めてしまうようなこともあると思いますけど、そういうときにちょっと無限の宇宙をイメージしてもらおうと、すべて不確かであることは確かですので、そんなに悩む事なのかなっていう。⁹⁴

《infinity~mirage》で示された、不確かなものを否定すること

なく丸ごと受け止め、そこから生まれる不安に立ち向かう力は、《NC_045512》と本展覧会において更なる発展を見せている。

《NC_045512》を構成する以上の各要素について、次章では山下+小林のこれまでの活動と特徴を概観することで、その関係性を紐解いていきたい。

山下+小林の活動について-《NC_045512》への軌跡-

山下+小林は、国内外の芸術祭や展覧会で活躍する千葉県出身のアート・ユニットである。2001年にユニットとしての活動を開始した後、2005年からベルリン芸術大学のスタンダグラスクラスで研究生として1年間を過ごす。研究生期間が終了した後もベルリンを拠点として欧米各地でグループ展やレジデンスへ参加し、各国で個展を開催するなど、着実に実績を積み重ねていく。2012年末からは二人の故郷である千葉県に拠点を移し、現在も精力的に活動を続けている。

国内外で高く評価されている山下+小林の制作活動に関しては、既に多くの批評がなされているところであるが、それらは概ね4つの論点に分類することができる。1点目は、独特な「時間」との向き合い方である。「人が歩くと道が出来る」という言葉を実証すべく、5日間にわたってスイスの公園を走り続けることで「∞」の記号を芝生の上に浮かび上がらせる様子を早回しで編集した映像作品《infinity》(2006年)⁹⁵では、二人の時間への向き合い方が明確に示されている。山下+小林の作品の大半においては、一見無駄とも思えるような行為を時間と労力を惜しまず取り組むことで、何かを生み出すことが目指されている。同時に、こうした時間の使い方は、「効率」や「合理性」で物事の価値を計ろうとする近代合理主義に対するささやかな抵抗も見て取れる。過去複数回にわたって引用されている、小林の「自分の時間なんていくらでも費やしてやるぞという気分⁹⁶」という言葉は、作家の時間に対するスタンスを分かりやすく表したのと言えだろう。

2点目は、「自然」へのまなざしである。山下+小林は、人間も動

物も、海や山、道端の木々や石も、全てを等しく自然の一部として捉え、それぞれに境目を設けない。荒木夏実や中尾英恵によって指摘されているように⁰⁶、こうしたフラットな自然との関係性の中で人間代表として他の存在と対峙することで、人間という存在が持つ面白みや輪郭を探ろうとする姿勢は、彼らの作品に通底するものである。本展出品作の《積み石》に見られる自然や動物との協働は、まさしくこうした自然観を表していると言えるだろう。

3点目は、彼らの作品に通底する「ユーモア」の存在についてである。二人のユーモアに対する意識はその活動の初期から継続しているものであり、山下が東京藝術大学在学時に執筆した博士論文は、現代美術におけるユーモアに関する考察を主題としている。山下+小林の作品におけるユーモアの存在は、社会の一般常識や主観から距離を置き、少しズレた立場から世界を捉える方法を提示する上で重要な役割を果たしている。そしてこれは、山下+小林ならではの手法として先行研究においても言及されている⁰⁷。例えば《GOING MAINSTREAM》(2010年)⁰⁸という映像作品では、「世界のメインストリームを行きたい」という作家、そして人間の根源的欲求に対して、世界最大級の河川であるナイルとアマゾンに小さなゴムボートで挑むという本来の語義とはズレた行動を起こすことによって、人間が持つ欲や煩悩を俯瞰して捉えることに成功している。

そして最後が、特に近年意識的に取り組まれている「不確かさ」への考察である。黒部市美術館での個展は、まさにこの不確かさについて作家が向き合い導き出した一つの解とすることができるだろう。《infinity~mirage》では、屋外に設置された巨大な「m」型看板の画像を蜃気楼という不確かな自然現象によって反転させ、「∞」を浮かび上がらせることに挑んだ。本作について、尺戸智佳子は「このプランが計画された当初からずっと誰もが半信半疑であった「∞」が出現した事実は、やはり、どう考えても、この不確かな世界の中で私たちに無限の可能性を信じさせてくれるものであると言わなければならない⁰⁹」と述べている。そしてこの「不確かさ」を「無限への可能性」に変換するという山下+小林ならではの姿勢は、本展覧会においてさらに発展したものとして私たちの前に立ち現れてくる。



fig.1 《infinity》2006年

fig.2 《GOING MAINSTREAM》あいちトリエンナーレ、2010年

「もし太陽に名前がなかったら」

では、本展覧会において更なる発展を見せた「不確かさ」への考察とはどのようなものであるのだろうか。「もし太陽に名前がなかったら」というテーマについて、山下+小林は次のように語っている。

人の脳は「わからない」を恐れます。適当でも何か理由を付けたがります。

本来すべて不確かであるこの世界に確かさを求めて、人は空に光るものにとりあえず「太陽」と名付ける事で安心します。もし「名」すら無かったら、それはとても怖いとも言えるし、とても自由だとも思えます。

アートは名称や常識を一旦退けることから始まります。私たちの作品群も、常にわからない恐怖とワクワクする自由を前提にして生まれています。

このタイトルは、私達の制作に通底している、そんな姿勢を喩えています。⁰⁹

このテーマに直接関連する作品として、ここでは本展覧会に出品されたもう一つの新作である《The Sun In The Corner》⁰³⁶を取り上げたい。作品が映写されている自立式スクリーンの裏側にひっそりと描かれた本作は、山下+小林が幼児に絵を教えた際に、彼らの多くが無意識に画用紙の角に太陽を描くという現象に気が付いたことをきっかけに制作された。言われてみれば、確かに絵の中の太陽は角に描かれる必然性はなく、画面の真横でも真ん中でも、時や場所、見る人によって様々な感じ方があるだろう。さらに言えば、その色はオレンジだけでなく、白や黄色、あるいは緑や紫だって、千差万別の描き方があるはずだ。にもかかわらず、太陽を画面の角にオレンジ色で描くという一種の「型」が生まれるのは何故だろうか。

この疑問について、山下+小林は日本を代表する仏教学者である鈴木大拙が説いた禅の思想を参照しながら、思考を巡らせている¹⁰。仏教では、善悪や優劣、自己と他者など、人が物事を頭で考

えて分析しようとすることを「分別^{ぶんべつ}」と言い、この分別こそが人間にとっての様々な苦悩を生み出すという。即ち、幼児が描く「かどの太陽」は、物事を分別し観念化せずには生きられない人間の性を具現化した存在であると言えることができるだろう。鈴木大拙は、こうした苦悩から解放されるための手段として「分析しないでそのまま丸飲みにする」即ち「死中、夢中、ひとまとめにして丸飲みする」ということができれば、仏教的になりますが、そこに本当の安心ができる¹¹と説いている。また、大拙が日本文化における禅の影響について英語圏の読者に向けて解き明かした名著『禅と日本文化』では、禅の特徴を「熟慮せず、自分の頭をあちこちへ向けることなく、すぐにそれを理解」する「瞬時の把握という教義」であるとし、「たとえ「見えないもの」に直面した時にも逡巡してはならない¹²」との教えを伝えている。大拙が唱えるこうした禅の思想は、先に述べたように「名称や常識を一旦退ける」ことから始まるアートの世界において、「常にわからない恐怖とワクワクする自由を前提に」、わからないものを丸ごと受け止めることで作品を生み出してきた山下+小林の姿勢と通じるものがある。

山下+小林の制作態度と禅の思想の類似性については、既にいくつかの先行研究によって指摘されている。小山市立車屋美術館の中尾英恵は、人間とその他の生き物を対等な存在として捉え、その価値観の違いを冷静に観察する二人の姿勢と、曹洞宗の開祖である道元禅師による「一水四見」という教えとの共通点について述べている¹³。作家本人もまた、海外で禅との関係性を指摘されること、その精神構造に類似点があることについて早くから言及している¹⁴。しかしながら、山下が「似ているな」と意識する事はあるにせよ、直接的に東洋的な仏教をリファアーはしていない¹⁵と述べるように、こうした禅との共通性については今まで山下+小林の意識の片隅にあったものの、意識的に参照されたのは今回が初めてであると言えるだろう。もしある日突然、得体の知れない未知の存在に日常を覆されたら。もし空に浮かぶ光輝く存在に「太陽」という名前が付いていなかったら。わからないものに対して人間が根源的に抱く恐れや不安に対して、私たちはどのように対処していけば良いの

か。この問いに対して山下+小林は、前述した禅の思想にインスピレーションを受けつつ、これまで積み重ねてきた活動を通して一つの答えを導き出そうと試みる。そしてこの試みは、《NC_045512》や《The Sun In The Corner》といった新作、さらには本展覧会全体を貫く「もし太陽に名前がなかったら」というテーマそのものに帰結していると言えるだろう。

「わからない」を受け入れるということ

さて、再び《NC_045512》が山下+小林の制作活動にとってどのような意義を持つか考えていきたい。本作には、時間と労力をかけることによって何かを生み出そうとする、山下+小林の一貫した姿勢が表れている。また、自然や動物など、これまで二人が「人間」という存在の輪郭を探るために協働してきたコントロールできない「他者」は、今回ウイルスにまで拡張され、その存在を通して人間社会の多面的な様相が映し出されている。そして、ユーモアを取り込むことで物事を一步引いた位置から俯瞰して捉えるという手法もまた、本作品に通じるものであると言えるだろう。

その上で本作品の新しさを考えてみると、やはり「不確か」であることや「わからない」ことへの恐れや不安という人間の内面的な感情に焦点を当て、山下+小林なりの新しい視点を提示したところにあるだろう。そこから見えてくるものは、鈴木大拙のいうところの「安心」、すなわち「分からない」ものを恐れなく飲み込んでみることでしがらみから抜け出すという、困難な世界に対する山下+小林なりの一つの答えである。これまでの活動やコンセプトを消化しながら、それを更に成熟させ、二人が向き合い続けてきた人間という存在の内面をより深く掘り下げることが試みた本作は、山下+小林の集大成であると同時に画期的な最新作と言える。

本作を、そして本展覧会を通して作り上げたこの世界観を、彼らは今後どのように広げていくのだろうか。その先では、きっとこの不確かで混沌とした現代を生き抜くための手がかりが、山下+小林らしいユーモアをたたえつつ、そっと差し出されているのだろう。

- 01 “Severe acute respiratory syndrome coronavirus 2 isolate Wuhan-Hu-1, co - Nucleotide - NCBI”, National Center for Biotechnology Information, 2020年7月18日登録、https://www.ncbi.nlm.nih.gov/nuccore/NC_045512.2/ [2022年11月25日閲覧]
- 02 荒木夏実「山下+小林流道のはずし方」、『Mai Yamashita+Naoto Kobayashi WORKS 2007-2011』タクロウソメヤコンテンポラリーアート、2011年、p.89。
- 03 山下麻衣「ユーモアある事実を生み出すということ」東京藝術大学大学院美術研究科 博士後期課程 油画研究領域 博士論文、2009年、p.55。
- 04 吉本郁子、尺戸智佳子 聞き手「山下麻衣+小林直人「曇気楼か。」インタビュー」、山下麻衣+小林直人「曇気楼か。」黒部市美術館、2021年9月24日、<http://mirage.yamashita-kobayashi.com/interview/> [2022年11月19日閲覧]
- 05 小川希 聞き手「インタビュー 事を起こす」、前掲注02、p.93。
- 06 荒木夏実「山下+小林流道のはずし方」、前掲注02、pp.88-89、及び中尾英恵「山下麻衣+小林直人 地球上を生きる1組の生き物として美術と向き合ってみる」『山下麻衣+小林直人：ノートとノートの中』、小山市立車屋美術館、2015年、pp.60-63を参照。
- 07 Thomas von Taschitzkiは、山下+小林の特徴として作品の中に厳格なコンセプトと子どものような遊び心やユーモアが共存していることを指摘している(Thomas von Taschitzki, “Rituals of play and rigour,” *Mai Yamashita+Naoto Kobayashi* (Switzerland: AKKU Uster, 2007), pp.4-5)。
- 08 尺戸智佳子「不確かな世界において、想像力で未来を開く」、山下麻衣+小林直人、尺戸智佳子 編『山下麻衣+小林直人「曇気楼か。」』黒部市美術館、2021年、p.45。
- 09 作家による説明資料より引用(2022年2月7日付、担当学芸員とのメールより)。
- 10 山下+小林は、今回の展覧会が「鈴木大拙が無分別や無明について話すインタビュー」を見た後に、「ふと公園の木の上にある「光るもの」を目にした際に、たとえばそれに名前がなかったとして…と空想したこと」から始まっていると述べている。(前掲注9)。
- 11 “鈴木大拙 NHK婦人の時間 聞き手犬養道子”、YouTube、2014年1月3日、<https://www.youtube.com/watch?v=3AKxPpfQs54&t=545s> [2022年11月25日閲覧]。
- 12 鈴木大拙著、碧海寿広 訳『禅と日本文化 新訳完全版』、株式会社KADOKAWA、2022年、pp.538-539。
- 13 同じ物でも、見る者によってその価値が異なるという世界観(中尾英恵「山下麻衣+小林直人 地球上を生きる1組の生き物として美術と向き合ってみる」、前掲注06、p.61)。
- 14 前掲注03。
- 15 前掲注03、p.58。